

アクセントの認識と知覚及び発話

— 近畿方言話者の場合 —

杉 藤 美代子
奥 村 綾 子

1. はじめに

話しことばには、語音の特徴とアクセント等の韻律的特徴とが含まれている。

例えば、「雨がやむ」という時、「アメガヤム」、または、[amega-jamu] という語音の特徴とともに、近畿方言ならば「アメガヤム」というアクセントが加わる。アクセントは、話しことばの中で、意味の伝達に役立ち、また、時には語音の不明瞭さを補っており、この点でことばの伝達上重要な役割を果たしている。

しかし、アクセント、ことに方言アクセントは、教育の中にほと

んど取入れられていない。このため、話者は、ことばをどのようなアクセントで言っているのか、例えば2拍語のアクセントは何種類あるのかというような問いに対しては全く無自覚で、多くの人が答えられない。

アクセントは方言によって異なるが、その中でもとりわけ、近畿アクセントは長い歴史を持ち、平安時代からの歴史を辿ることができから重要な位置を占めている。これを大学の国語学の講義中で扱うとき、学ぶ側に生粋の近畿方言話者が多い場合には講義がよく理解されそうなものであるが、そうはいかない。

これは言語の持つ特徴の興味深い部分の一つであり、自己の左脳に在る言語野で扱っていることばの働きを、自覚し、これを学習を

通さずに説明することは、できにくいものである。

筆者はアクセントの持つこのような面に気づいて、新入生が、自己の発話するアクセントをどのように理解し、これを分類することができるかについて、毎年何らかの形で確めてきた。

ことに筆者の興味をひいたのは、筆者が長年問題としてきた〇〇型¹⁾、つまり第1拍は低く始まって、第2拍で上昇し、後下降する型についてである。近畿方言話者のうち、この型を自ら発話していることを自覚している人は、稀である。

この事実は、過去の文献、例えば平安末期の『観智院本類聚名義抄』、室町末期の『補忘記』等に下降音調の記載のないこと等と関連があるのではないかと疑って、近畿方言話者の、この型に関する自覚の有無をひき出すべく種々試みてきた。

その結果、アメのアクセントが、イネ等のアクセントと異なることを始めに自覚できる人はまずいない。稀にあっても、上級生の姉から、または、たまたま高校時代に先生から学んだという特殊な例であり、何らかの形で学習を経ている。

調査を始めた10年ほど前には、下降音調は大学生の年令でも相当よく保持されていた。しかし、現在では、この下降音調が失われる傾向があり、発話の調査をも加える必要がでてきた。本人がこの型の保持者であるか否かをも調べる必要があり、発話と知覚との関わりも問題とする必要がある。このため、問題はやや複雑になってきたが、方言アクセントの保持されている今のうちに、〇〇型の意識に関する調査を行うことが改めて重要と思われた。

アクセント型発話の自覚ないし認識の調査を行い、これと本人の発話との関係、また、聞き取りによる型の知覚との関係を研究することは、言語の本質を知る上で何らかの手がかりになるように思われた。そこで、上記の型を中心として、近畿アクセントの4種の型について、その認識と知覚及び発話の検討を行ってきた。

今回、よき協力者を得て、調査の一部をここにまとめることができた。未整理の部分も多く、それについては逐次報告する予定であるが、一応の結果をここに報告するものである。

なお、ここではアクセントの型を音響的実験の結果に基づいて、A型(〇〇→〇〇▷)、B型(〇〇→〇〇▷)、B'型(〇〇→〇〇▷)、C型(〇〇→〇〇▷)、D型(〇〇→〇〇▷)とする。

2. 調査の対象とその方法

ここで扱う対象は、女子大の国文学科生34名である。条件を、本人が大阪府下に生まれ育った者に限定した。

調査は、入学直後、次の方法で行った。

1. 方言に対する意識調査(予備調査)

大阪方言話者である被験者の、大阪方言と東京方言(標準語)に対する志向の調査である。

2. アクセントに対する認識調査

アクセントに関する5つの質問を、それぞれ一つずつ一枚の紙片に書いたものを用意し、一枚ずつ書かせては回収していった。

その1、アクセントとは何か。

その2、これまで、アクセントに関する教育を受けたことがあるかどうか、また、それはどのようなものか。

その3、自分自身のアクセント型についての自覚の有無。また、型の種類を分類し、表示できるか否か。これについては、後にのべるように3段階の質問を用意し、実施した。

3. 知覚実験

自然音声と合成音声の2種類のアクセント型の知覚実験を行った。

その1、何の説明も行わずに、明瞭な発話による近畿方言（女性話者）の、4種の型の単語を2個ずつ各5回、合計40個の音声乱数配列し、編集した録音テープを聞かせた。そして、アクセントの区別を、ことばでも記号でもよいとして記述させた。

その2、電子計算機を用いて作成した合成音声による〇〇型と〇〇型の識別実験を行った。

4. アクセントの発話

2拍語第5類を中心とした単語68個及びその単語を使った単語のリストを用意し、被験者本人の発話を収録した。これによって被験者のアクセント型を調べた。

3. 意識調査

3-1 方言に対する意識調査

この調査は、近畿方言話者である被験者が自分たちの方言に対して、どのような意識を持っているか、これについて行ったものである。この結果をそれぞれの被験者のアクセント型の認識、知覚、発話について考察する時の参考とした。

調査はアンケート形式で行った。4つの質問事項について、それぞれ4種類の答えを用意し、該当するものに〇印を付けさせた。このアンケートは、国立国語研究所、『大都市の言語生活』²⁾におけるアンケート調査に準じて作成したものである。

質問事項は、次の4つである。

- (1) あなたは、御自身の地域の方言についてどう思いますか。
- (2) 現在、東京方言は標準語とされていますが、東京方言についてあなたはどう思いますか。
- (3) あなたは、他人と話すとき、自分の方言が気になるほうですか。
- (4) あなたは、人前で話ができるほうですか。

(1)、(2)の質問は、近畿方言に対してまた標準語に対してどのような印象を持ち、使用しているかを尋ねたものである。

結果は、答えによって、自分の方言を好んでいるか（方言志向）、否か（反方言志向）の2つに分けて表1に示した。

表1 方言に対する意識調査 (表内の数字は人数)

| 志向 対象 | 方言志向 | | どちらとも | | 反方言志向 | |
|-----------|-------------|----|-------|----|---------|--|
| | | | | | | |
| 1 近畿方言 | 1 軽快 | 14 | 15 | 1 | 重苦しい | |
| | 2 きれい | 4 | 19 | 7 | きたない | |
| | 3 好き | 23 | 6 | 1 | きらい | |
| | 4 よく使う | 25 | 2 | 3 | あまり使わない | |
| 2 東京方言 | 1 重苦しい | 5 | 14 | 11 | 軽快 | |
| | 2 聞きにくい | 8 | 11 | 11 | 聞きやすい | |
| | 3 親しみにくい | 19 | 10 | 1 | 親しみやすい | |
| | 4 使いたいと思わない | 10 | 19 | 1 | 使いたいと思う | |

表1の1についてみると、方言に対する印象について質問1、2は、「どちらとも」という解答が多くなってしまったが、「軽快」という印象が14名(46.7%)におよんでいる。また、発話者が自分自身の方言をどのように考え使っているかについての質問3、4の答えを見ると、いずれも約8割が自分たちの方言を好み、日常の会話でよく使っていると答えている。この結果は、本人の発話の上に影響をおよぼすものと考えられる。

表1の2について見ると、いずれの項目においても、はっきりし

た答えを避ける傾向にあった。しかし、共通語に対する印象(質問(1)、(2))と、発話者自身の好み(質問(3)、(4))との2点に分けて結果を見ると、共通語は、日常、TV等でよく聞かれるためか、その印象は悪くないが、方言話者自身にとっては、親しみにくく、進んで使いたいとは思わないという傾向がある。

(3)、(4)の質問は、被験者の発話時における意識を調査したものである。(3)の質問に対して、「自分の方言が気にならない」という答えが27名(90%)を占め、また(4)の質問に対しては20名(66.7%)が「人前で話ができる」と答えた。この2つの質問から、近畿方言話者は自分の方言に対して、いわゆる方言コンプレックスのようなものはなく、逆に近畿方言を自分自身の方言として肯定的な傾向にあることがうかがえる。

以上のように、4つの質問を通して、被験者は、近畿方言を好む傾向にあり、方言擁護の意識が強いと言ったことができよう。

| | 方言志向 | 反方言志向 | どちらとも |
|---|-------|-------|-------|
| % | 51.67 | 16.33 | 32 |

次にはこの被験者が、自分自身の持つアクセントをどのように捉え、それらをどう知覚し、発話しているか、これをのべよう。

3-2 アクセントに対する認識調査

この調査は、大学でアクセントに関する教育を全く受けていない新入生という条件の下で、被験者がアクセントに関してどの程度の

認識を持っているかについて調べた。

調査は次の方法で行った。アクセントに関する5つの質問を用意し、1枚の紙にそれぞれ一つの質問を書いたものを次々に配り、答えを求めた。質問の内容は次のとおりである。

1. アクセントとは何ですか。
2. アクセントについて学んだことがありますか。
3. かな2字の単語、例えば「うめ」その他に何種類のアクセントがありますか。また、それはどんなアクセントですか。
4. 下記の単語のアクセントを、ことば、記号等で説明し、これらが何種類に分類されるか分けてみて下さい。
風、歌、板、汗、犬、竹、糸、音、声、色
5. 下記の単語を4と同様に示して下さい。
飴、型、息、箸、雨、鼻、橋、垢、肩、赤、花、端

1、2の質問は、アクセントをどう捉えているか、今までにどの程度のアクセント教育を受けているかを知るための調査である。3、4、5は、京阪式のアクセントの話者であり、4種類の型を持つ被験者が、アクセントの型をどの程度認識しているかを調べるためのものである。

1の質問に対する解答の結果は次の通りである。

| | 強 弱 | 高 低 | 抑 揚 | 方 言 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 人 数 | 15 | 9 | 5 | 3 |
| 割 合 | 4.7 | 2.8 | 1.6 | 0.9 |

本人の発話は高低で行われている³⁾にもかかわらず、高低と答えた者はわずかに9名、全体の3割に満たない。それに対して、全体の5割近くが強弱という答えを出している。これには、2の質問に対する答えが関係している。

2の質問に対する答えは次の通りである。

| | な し | 英語の時間 | 教 科 書 | 音楽の時間 | クラブの時間 |
|----|-----|-------|-------|-------|--------|
| 人数 | 16 | 8 | 4 | 2 | 2 |

今までにアクセントについて学んだことがないと答えた者が半数を占め、次に多いのが英語におけるアクセント教育であった。「英語」と答えた8名の、1の解答の内訳は、「強弱」5名、「抑揚」2名、「高低」1名である。1の質問において「強弱」という解答が多かったのは、英語のアクセントが強弱として教えられているために、日本語のアクセントもまた、強弱として認識されていたと考えられる。

1の解答において「高低」、もしくは「方言」というように日本語と結び付いた答えを出した者12名のうち、2で「なし」と答えた者は8名で(残り4名は、「放送クラブ」1名、「音楽」1名、「教科書」1名、「英語」1名)、特に何らかの教育がない場合は、多くが英語と切り放してアクセントを考えた場合にのみ日本語アクセントに関連する答えが出ている。

以上のように、アクセントに対する認識は曖昧で、本人が自分自

身の発話と結び付けて認識することは、容易でなく、多くの場合、英語教育との結び付きにおいて認識していると考えられる。

次に、3、4、5の質問について結果を見る。これは、アクセントの型の認識についての調査である。

結果のうち、重要な点は、3、4、5の質問を通して京阪式アクセント第5類の下降音調を伴うアクセント、B型に気付いた被験者は1名もいなかったということである。これは、興味深い結果である。なぜならば、後の発話の収録において被験者32名中20名が、本人の発話においてはB型を保持していることが、明らかになったからである。

これについては、2つの理由が考えられる。まず、先に行った1、2の調査結果からもうかがえるように、被験者は自己の発話との関連において、これを考えることができにくいということである。アクセントの認識が曖昧であることが、ここでも見られる。他の一つは、第5類2拍目の下降音調が語の意味の弁別とは無関係であるということである。近畿方言話者にとって、/ame/ は「アメ」と発話されても、「アメ」と発話されても「雨」と理解できるものである。従って、被験者は純粋に高さの時間的変化のみでこの型をみとめなければならないが、日常、我々はアクセントを、その単語の持つ意味との結び付きによって区別し使っているために、この型は認識されにくい。以上2点が、B型の調査の上に表われてこなかった理由として考えられる。

次に、他の3種類の型に関する結果は次のとおりである。

| 種類 | 調査 | 質問 3 | 質問 4 | 質問 5 |
|----|----|------|-------|------|
| | | 不可 | 3 (名) | 3 |
| 2 | 種類 | 11 | 11 | 12 |
| 3 | 種類 | 18 | 18 | 19 |

質問1、2でアクセントについての認識が曖昧であったにもかかわらず、ここでは3つの質問を通して、5～6割の被験者が3種類の型(〇〇型、〇〇型、〇〇型)の存在に気付いている。これは、具体的にいくつかの単語をあげたことによって実際の発話と結び付いたためと考えられる。調査用紙につけられたアクセントマークや説明からは、アクセントを高低変化でとらえて型を分類していると思われる被験者が半数におよんでいる。

型別に結果を見ると、〇〇型と〇〇型は認識されやすいことがわかる。2種類の型の存在に気付いた被験者のうちの1名を除く全員が、〇〇型と〇〇型を示している。つまり、2種類か3種類かのちがいは、〇〇型に気付いているか否かによって分かれる。〇〇型は、これまでに行ってきた知覚実験の結果でも、〇〇型や〇〇型に比べて判断にゆれがあり、型の識別がされにくい傾向にある。今回の結果ともあわせて、今後検討していかなければならない問題点の一つである。次に質問3から順に結果を見ていくことにする。

3の質問では、単に2拍語の単語にいくつの型があるかを尋ね、例にあげた単語は2拍語の意味を知らせるための1語「うめ」であった。しかし、すでにここで18名の被験者が3種類の型に気づき、それらの型を各の方法で示している。

被験者は、自分でいくつかの単語を調査用紙に書き出し、型を見つけて出している。方法としては、同じ語音構成でアクセントによって意味の異なるものをあげている場合、例えば「橋、箸、端」「雲、蜘蛛」等、また四季「春、夏、秋、冬」をあげている場合が多く見られる。

また、2拍語の各拍のどちらか、つまり前にアクセントがあるか、後にあるかという考え方で型の種類を見つけ出している場合も多く、この結果、ほとんどの被験者が最低2種類のアクセント型を示すことになった。

4の質問では、調査者側から、各型に対応する単語を10個示し

| 類 | 別 | 型 | 単 | 語 |
|-------|---|----|---|---|
| 第 1 類 | | 〇〇 | 風 | 竹 |
| 第 2 類 | | 〇〇 | 歌 | 音 |
| 第 3 類 | | 〇〇 | 犬 | 色 |
| 第 4 類 | | 〇〇 | 板 | 糸 |
| 第 5 類 | | 〇〇 | 汗 | 色 |

た。被験者が全てのアクセント型について、自己の発話と結び付けて考えられるようにするためである。

3の質問では、全くアクセント型のわからなかった被験者のうち2名が2種類のアクセント型に気付いた。また、2種類のアクセント型にしか気付かなかった被験者のうち3名が、ここでは3種類を示した。しかし、逆にこちらから示した単語のアクセント型をまちがえたために、ここでは2種類になってしまった者が2名あり（この2名は、第一類〇〇型をまちがえた）、また質問の意味を取り違えたために型の区別ができなくなってしまった被験者が2名いた。

5の質問では、同じ語音構成でアクセントによって意味の異なる単語を12個示した。それらの単語に類別に表2に示した。被験者に

表2 アクセントに対する認識調査-5に用いた単語

| 類 | 別 | 型 | 所 | 属 | 単 | 語 |
|-------|---|----|----|----|----|---|
| 第 1 類 | | 〇〇 | 鈴、 | 端、 | 鼻 | |
| 第 2 類 | | 〇〇 | 型、 | 橋 | | |
| 第 3 類 | | 〇〇 | | 垢 | 花、 | |
| 第 4 類 | | 〇〇 | 肩、 | 箸、 | 息 | |
| 第 5 類 | | 〇〇 | 雨、 | 赤 | | |

意味との関連において単語に対応をつけさせて、一層アクセント型の種類を見つけ出し易くするためである。

ここで、3の質問で3種類のアクセント型を見い出しながら、4の調査で2種類になっていた被験者2名が、単語に対応をつけることによって3種類の型を区別した。また、4の調査でアクセントを見い出せなかった3名が2種類のアクセント型を区別した。同じ語音構成の単語を示すことによって、より一層アクセント型と意味との関連が明らかとなり、型の区別が行い易くなったと思われる。

以上、3、4、5の調査を通してみると、3つの調査のうち1回でも3種類の型に気付いた被験者は21名(65.6%)、2種類の型に気付いた被験者は11名(34.4%)となり、全員が何らかの形で型の区別を行った。

アクセント型の認識は、実際の発話と結び付き、また単語の持つ意味との関連において考えた時認識され易くなる。しかし、第5類〇〇型は認識されない。また第一類〇〇型も認識されにくい傾向にある。

4. 知覚実験

4-1、自然音声による近畿方言4つの型の知覚実験

実験は、次のような方法で行った。

まず、大阪府下生まれ育ちで、第5類2拍目の下降音調を含めて4つのアクセント型を持つ発話者の自然な発話を収録した。収録した資料の中には、/ame/の語音構成で4つのアクセント型に相当するリストが組み込まれている。「天」(〇〇型)、「雨」(〇〇型、

もしくは〇〇型)、「飴」(〇〇型)である。それぞれ12回の発話を収録した。それらについて音声資料をスペクトログラフを用いて音響的に分析した。あらかじめ知覚実験を行い、これらの音声資料から各アクセント型につき2種類を選んだ。これを用いて各音声につき5回、合計40個の音声をランダム配列した知覚実験用録音テープを作成した。(図1)

これを被験者に聞かせて、アクセント型の判定を行わせた。被験者は、アクセント型の知覚実験を一度も経験したことがない。また実験を行う時も、アクセントの型については何の説明も加えていない。

被験者は各の方法で「アメ」と書かれた文字の上にアクセント型を表記した。従って、示されたアクセントマークは様々である。多く見られたマークは、アクセントの位置に線を付ける、また曲線で高低を表わすものである。これらは、アクセントを高低で表わしている。また、英語におけるアクセントのマークを使っている者も多く見られた。つまり〇〇型はアメ、〇〇型はアメ、〇〇型はアメのように示す。先に報告した認識調査で、アクセントを強弱で捉えている被験者が多かったが、その傾向は知覚実験においても見られた。

実験の結果は、次のようであった。

まず、この自然音声の知覚実験において、B型を知覚したと見られる被験者は2名であった。一人は、B型を $\overset{\circ}{\circ}$ と示し、C型を $\circ\circ$ と示してB型の下降音調を表わした。他の一人は、B型を

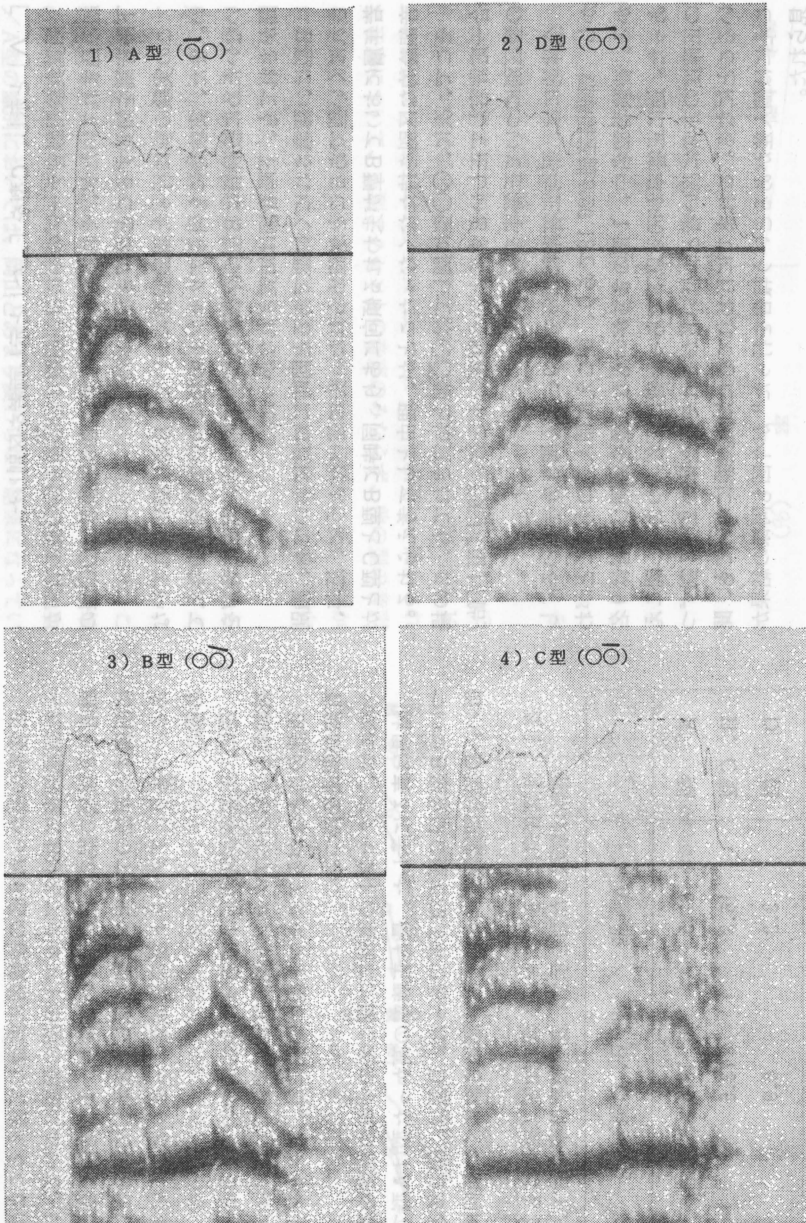


図1 知覚実験に用いた近畿方言4つのアクセント型（自然音声—話者S.Sによる）

「 \wedge 」と示し、C型を「 \vee 」と示し両者を区別した。

知覚実験用録音テープの中には、明瞭な $\bigcirc\bigcirc$ 型と $\bigcirc\bigcirc$ 型の音声が組み込まれていたが、それにもかかわらず、他の被験者は $\bigcirc\bigcirc$ 型の下降音調を知覚することができなかった。

この実験の前に行った認識調査においてもB型は認められていない。また、実験時にも何らアクセントの型についての知識を与えていないために被験者はB型の存在に気づいていない。実際に音声を聞かされても、下降音調は知覚されなかった。

B型は、認識されにくい型であると同時に知覚においても、識別されにくい型であることが確められた。先に述べたように、近年、若年層においてB型が失われる傾向にあり、同時にB型とC型とが音韻論的な区別を持たなくなったことが、理由として考えられる。

そこで、次に、 $\bigcirc\bigcirc$ 型に関しては $\bigcirc\bigcirc$ 型と知覚されても、この場合一応許容して正しいとするという判断のもとに、「天」「雨」「鉛」の型区別について正答率を見た。

全体的には、平均正答率72.2%であり、よく聞き分けている。しかし、標準偏差値が26.18であり、聞こえに個人差のあることがわかる。被験者32名中、1個のまちがいがもなく型を識別した者は9名あった。逆に正答率が50%以下であった者は7名。つまり、聞こえの正確度の非常に高い者と、低い者がそれぞれ全体の2～3割ずついることになる。これまでに行われてきた知覚実験においても、聞こえには個人差があるという報告を行った⁴⁾が今回も同様の結果が見られた。

正答率の高かった9名の被験者に共通して言えることは、先に行った認識調査におけるアクセントの型の認識において、いずれの被験者も3種類の型の存在に気付いており、1名を除く全員が各の型に所属する単語のアクセント型を正しく表示しているということである。つまり、アクセント型の認識がはっきりとしている被験者である。

逆に、正答率が50%以下であった7名についてみると、いずれの被験者も各単語のアクセント型の区別ができていない。

当然のことながらアクセント型の知覚には、アクセントの認識の有無が関連を持つ。

次には、アクセントの型別に、聞こえのゆれの程度を見ていく。

結果は表3に示した。最も正聴率の高かった型はA型で81.5%、ついでB型及びC型で73.5%であった。D型は、60.1%と正聴率が低い。D型は認識調査においても、認識されにくい傾向にある型と

表3 自然音声によるアクセント型の知覚（縦軸はもとの型、横軸は聴取した型を示す。表内数字は率を示す）

| | A 型 | B、C型 | D型 |
|------|------|------|------|
| A 型 | 81.5 | 19.6 | 27.1 |
| B、C型 | 15.3 | 73.5 | 12.8 |
| D 型 | 3.2 | 6.9 | 60.1 |

| 誤まった型 | 率 (%) |
|-------|-------|
| A 型 | 46.72 |
| C 型 | 28.12 |
| D 型 | 10.11 |

いう結果が出ており、興味深い。これらの結果を考えるために、これらの型がどの型と聞き誤まれたのかを見ることにする。

上記は、誤まって判断された型の全体における率を示したものである。これをみると、A型が最も多く46.72%、ついでC型28.12%、D型10.11%の順になっている。つまり、被験者は、聞かされた音声について、A型アクセントの音声のみならず、他の型の音声をもA型と聞く傾向にあることがわかる。逆にD型は、その区別がされにくいだけでなく、被験者の型判断において意識されない傾向にある型といえる。

アクセント型の判断は、その認識の場合と同様に、各拍のどちらかにアクセントを聞く場合が多く、その時、より多く前の拍にアクセントを聞く傾向にあると言えよう。

図2は、アクセント型の知覚の方言差を示したものである⁴⁾。これを見るとA型/B型の識別、C型/D型の識別において、他地域の被験者に比べて格段に識別能力の高かった大阪の被験者が、D型/A型の識別においては、岡山とあまり変わらない結果になってい

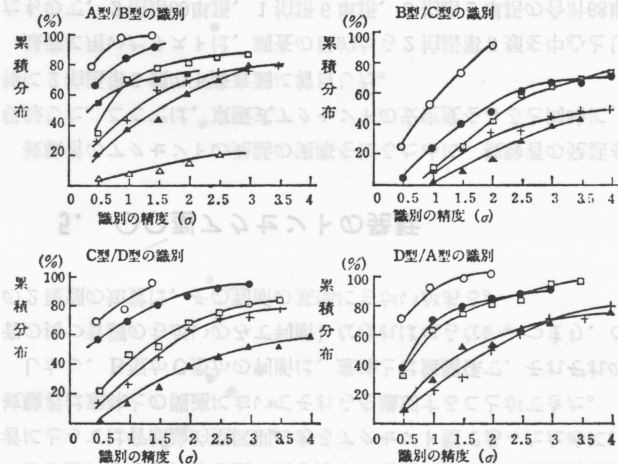


図2 アクセント識別能力の各方言別による累積分布 ●大阪、■東京、□岡山、+長崎、▲米沢、△福井の各高校生（ただし○印は大阪の音楽専攻の大学生）⁴⁾

る。つまり、 \overline{OO} 型と \overline{OO} 型の判断が大阪（近畿）方言話者にとって難しいものであることが表われている。

今回の認識調査及び自然音声による知覚実験の結果は、まさにこのことを裏付けるものである。

そして、 \overline{OO} 型、つまり両方の拍にアクセントがある高型型の認識が弱い被験者は、この型をA型に聞く。その理由として、図1に示したアクセント型の基本周波数曲線を見るとD型とA型は第1拍目の高さが、ほぼ同じであり、D型の第2拍が自然の減衰による下降を伴っているために、A型（前にアクセントをおく）か、C型（後にアクセントをおく）かのどちらかに判断するとすれば、より多くA型と聞くということが考えられる。

4-2 合成音声による近畿方言 \overline{OO} 型の知覚実験

先に報告した認識調査及び4つのアクセント型の知覚実験において、区別がほとんどなされなかったB型について、特に知覚実験を行った。若年層において、音韻論的な区別がなくなったB型とC型についてその両者の区別がいかになされるかを調べるためである。

実験には合成音声を用いた。2つのアクセント型について、それぞれの型のアクセント指令の時間的位置を少しずつずらすことによってB型（ \overline{A} メ）からC型（ \overline{A} メ）へ変化させてある。つまり図3に示した1番から11番までの11種類の音刺激を各10個、合計110個の音刺激をランダム配列した知覚実験用録音テープを用いた。³⁾⁵⁾

この録音テープを被験者に聞かせ、B型かC型かのいずれかに判

断させた。結果は、判断のゆれ幅を出すことによって、識別能力を判定した。

図4は、縦軸に判断のゆれ（ σ^{-1} ）をとり、横軸には判断境界（ μ ）をとって分布を示した。これを見ると、判断の境界はほぼ4から6のせまい範囲に分布しているが、判断のゆれ幅は広く判断の能力には個人差の大きいことがわかる。

\overline{OO} 型、 \overline{OO} 型、 \overline{OO} 型の聞き分けの場合は、各型が近畿方言話者にとっては音韻論的型区別のあるアクセント型であったために、被験者は意味との関連においてそれらを識別することができた。

しかし、B型かC型かの判断は、意味とは無関係で、それぞれの音の持つ音調のちがいのみで判断しなければならない。つまり、この2種類の知覚は、その判断の基準にちがいがある。

5. \overline{OO} 型アクセントの発話

被験者のアクセントの発話の実際を知るために、被験者の発話を収録した。ここでは、京阪式アクセントの安定度をみると同時に、特に2拍語第5類の下降音調に着目した。

録音に用いたリストは、調査の目的から2拍語第5類を中心としたもので、2拍語60単語、1拍語6単語、3拍語2単語の合計68単語及び単文である。一枚の紙に68単語を乱数配列したもの、同様に、単文を示したリストを用意し、自然な録音を得るために被験者自身で自分の発話を収録してもらった。単語3回、単文1回の発話

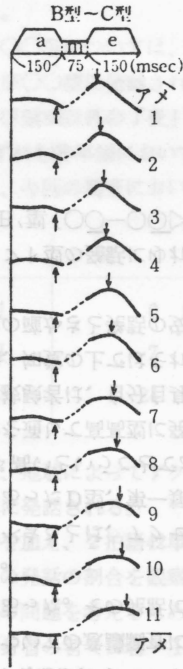


図3 音刺激 (B型からC型) No. 1 ~ No. 11の基本周波数曲線 (矢印は声上げの始端(↑)と終端(↓)の時点を示す。)⁹⁾

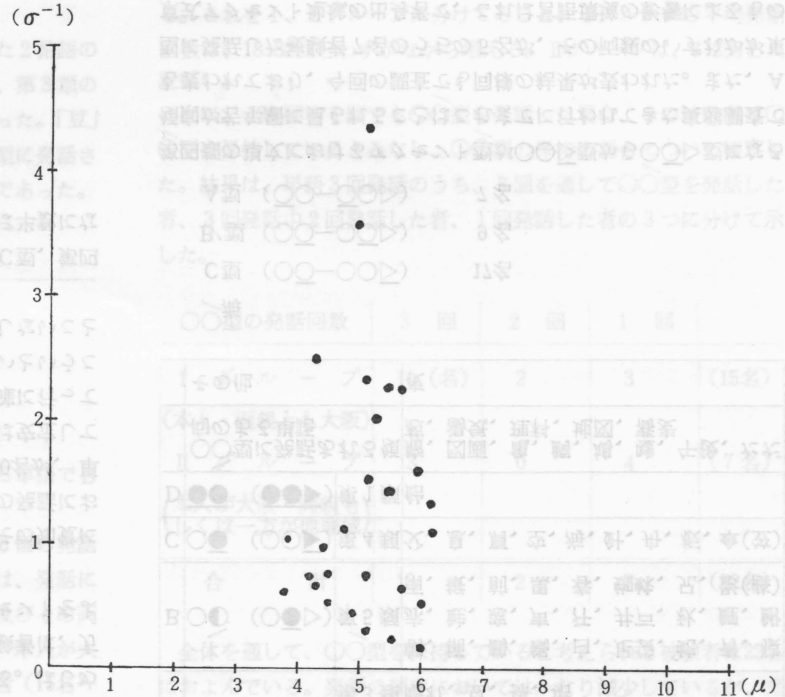


図4 合成音声によるB型~C型の知覚 (縦軸に聞こえのゆれ幅の値 (σ^{-1}) を、横軸に判断境界 (μ) をとり、それぞれの値の分布を示した。)

である。収録した単語のうち、ここで取り上げる2拍語の単語を類別に表4に示した。収録した資料の処理は、筆者らが録音テープを鑑取しアクセント型を決定した。

全体を通して、京阪式アクセントはよく保持されている。はじめに行った方言についての意識調査においてもこれらの被験者は、方言嗜好の傾向にあった。その発話においても京阪式アクセントをよく保持している。

ここで注目すべきことは、アクセント型の認識、及びその知覚において不安定であったD型、第一類の単語「飴」が、その発話においては安定度が高いということである。被験者34名中30名が、単語、単文の発話を通して高高型に発話し、アクセント型は安定している。つまり、被験者は、自分自身の発話においては正確に行っている型を、認識、知覚の上ではそれ程明瞭に区別できないということであり、知覚の確かさと発話の安定度は必ずしも一致しないことがうかがえる。

逆に、アクセント型の発話にゆれの多い単語がある。C型、第四類「海」等は、B'型(〇〇-〇〇▷)、もしくはA型がほぼ半数になっている。

表4 収録単語中の類別単語及び〇〇型に発話される傾向の単語

| | | |
|------------|------------------|---|
| A ●〇 (●〇▷) | 第2類 | 牙 |
| | 第3類 | 晴れ、豆、孫、垢 |
| B 〇〇 (〇〇▷) | 第5類 | 朝、桶、鶴、鍋、白、足袋、蛇、青、猿赤、蛙、窓、声、汗、井戸、秋、鯉、鮎雨、縦、前、黒、春、蜘蛛、兄、影(蔭) |
| | | |
| C 〇● (〇〇▷) | 第4類 | 父、息、肩、空、海、針、舟、板、傘(笠) |
| D ●● (●●▷) | 第1類 | 飴 |
| | 〇〇型に発話される傾向のある単語 | 瘤、図画、亀、鰐、鳩、嘘、午後、ただ葱、湯気、理科、地図、蕎麦 |
| | その他 | 夜 |

海

C型 (〇〇-〇〇▷) 17名

B'型 (〇〇-〇〇▷) 9名

A型 (〇〇-〇〇▷) 7名

第四類の単文におけるアクセント型が〇〇▷型から〇〇▷型になる傾向が若年層に見られることはこれまでに行われてきた実態調査でも表われており、今回の調査でも同様の結果が表われた。また、A型に発話した被験者7名のうちの5名が、その両親のいずれかが東京式アクセント地域の出身者で、これは言語環境の影響によるもの

かと考えられた。

次に、第5類〇〇型については、ここでは表4にあげた2拍語のうち、第5類及び〇〇型に発話される傾向にある単語に、第3類の「豆」「晴れ」及び類別以外の「夜」を加えた42単語を扱った。「豆」「晴れ」は、いずれも若年層においてはB型もしくはB'型に発話される傾向があり、今回の調査においてもその傾向が顕著であった。

| | | 晴 | れ | 豆 |
|----|---|----|-----|----|
| A | 型 | 0 | (名) | 3 |
| B | 型 | 7 | | 5 |
| B' | 型 | 24 | | 23 |

また「夜」は、地域によってアクセント型にゆれのある単語でB型もしくはC型に発話される。

これらの単語を加え、2拍語42単語3回発話、合計126個の発話における〇〇型の発話の割合を観察した。また、ここでは、発話における言語環境の問題を考えるために、被験者を、本人及びその両親が大阪府下出身者の者(19名-Iグループとする)と、本人が大阪府下出身でその両親、もしくはどちらかが他地域出身者(15名-IIグループとする)の2つのグループに分けて集計した。

まず、被験者34名の平均〇〇型発話回数数は、13.41回(標準偏差値20.81)であった。発話の割合は低く個人差のあることがわか

る。これをI、IIグループに分けてみると、Iグループの平均発話回数数は、18.32回とわずかながら増える。IIグループは、7.2回と大変低い。

次に、126回中1回でも〇〇型を発話した場合、その被験者は〇〇型を保持しているとみなし、〇〇型の保持の割合について観察した。結果は、単語3回発話のうち、3回を通して〇〇型を発話した者、3回発話中2回発話した者、1回発話した者の3つに分けて示した。

| 〇〇型の発話回数 | 3回 | 2回 | 1回 | |
|------------------------------------|-------|----|----|-------|
| Iグループ (本人・両親とも大阪) | 10(名) | 2 | 3 | (15名) |
| IIグループ (本人が大阪・両親も しくは一方が他地域) | 3 | 0 | 4 | (7名) |
| 合計 | 13 | 2 | 7 | (22名) |

全体を通して、〇〇型を保持していると考えられる被験者は22名におよんでいる。発話の頻度においてはかなり減少しているが、型そのものは保持されていると見ることができる。IグループとIIグループに分けてみると、Iグループの保持率が8割近いのに対してIIグループの保持率は5割に満たない。またIIグループの保持者7

名のうち5名までは母親が大阪府下の出身者であった。〇〇型の保持には、被験者の両親、特に母親のアクセント型がその要因の一つとして考えられる。

6. アクセント型の発話と知覚

前章で調べたアクセント型発話の結果に基づいて、第5類下降音調の保持とアクセント型の知覚について、結果を観察した。

B型は、認識調査においては全く区別されず、近畿方言4つの型の知覚においては、わずかに2名が区別していると見られた。合成音声による知覚実験においては、B型かC型かの強制判断であったために何らかの識別はされたが、結果は個人差の大きいものであった。

そこで、ここでは、アクセント型の発話における結果を基に、被験者を本人及び両親が大阪府下出身の者（Iグループ）、本人及びその母親が大阪府下出身の者（IIグループ）と本人及びその父親が大阪府下出身、もしくは両親が他地域出身の者（II'グループ）の3つのグループに分けた。そして、それぞれのグループにおけるB型の発話、近畿方言4つの型の知覚と合成音声によるB型/C型の識別についての結果を観察した。

結果は、表5に示した。

まず、B型の発話についてみると、Iグループ、つまり生粋の大阪府下出身者が最も高く、ついでIIグループ（本人及びその母親が

表5 近畿方言話者の〇〇型発話回数、自然音声4つの型の区別の正確度及び合成音声B型/C型の識別の精度の比較（表内数字は平均、()内は標準偏差値）

| | 〇〇型 発話回数 | 自然音声4つの 型の区別の正確度 | 合成音声B型/C型 の識別の精度 |
|----------|-------------|---------------------|---------------------|
| I グループ | 12.6 (15.0) | 70.9 (28.6) | 0.91 (0.75) |
| II グループ | 11.8 (22.8) | 71.9 (25.7) | 1.39 (1.71) |
| II' グループ | 4.6 (12.7) | 79.3 (23.6) | 1.17 (0.82) |

大阪府下出身)が高く、II'グループは、他の2つのグループに比べて格段に低い。

知覚について見ると、発話において見られたような傾向は見られず、逆にII'グループの正聴率が高い。

近畿方言4つの型の知覚と、合成音声B型/C型の識別には関係が見られる、つまり、4つの型の知覚の正確な者は比較的B型/C型の識別の精度も高い。しかし、アクセントの知覚とB型の発話には相関関係は見られず、B型の発話には、むしろ、言語環境が影響すると考えられる。

7. む す び

国文学科の新入生を対象として、アクセントにつき一貫した調査

を行った。ここではそのうち、大阪府下出身の学生34名の結果についてまとめ、次のことを明らかにした。

1. 自分の話すアクセントがどのようなものであるか、これに対する自覚ないし認識は、話者にとって不明確なものであった。ことに、 \overline{OO} 型は、その発話者にも全く自覚されていなかった。次に自覚できにくいのは、 \overline{OO} 型であった。アクセントの知識は英語の学習によって得たものであり、日本語のアクセントについてはほとんど理解ができていないことが明らかとなった。

2. この稿で主として扱った \overline{OO} 型の下降音調は、全く認識されていなかった。自然音声の4つの型の知覚実験においても、何らかの区別を行ったと見られる被験者は、34名中わずかに2名であった。また、合成音声による知覚実験では、強制判断であったために何らかの識別が行われたが、その識別には個人差が大きかった。

3. 自然音声を用いたアクセントの型の知覚実験で、被験者の多くは2拍語の場合、アクセントが第1拍にあるか、第2拍にあるかという形で区別しようとしていることがわかった。これは、英語のアクセントの学習と関連があろう。 \overline{OO} 型の認識及び知覚ができにくいことも、これと関係があるかもしれない。

このようなアクセント型の聴取による区別は、上記のアクセントに対する自覚ないし認識と関係があり、認識のはっきりしている者は知覚も明確である。

4. これらのアクセントの認識、知覚と発話との関連については、次のようである。

認識、知覚において区別されにくかった \overline{OO} 型は発話においてはアクセント型が安定している。

また、これらの被験者は、 \overline{OO} 型の下降音調を半数以上が保持していたが、その知覚との結び付きは稀薄である。下降音調の保持の有無は、特に、言語環境によるものが大きい、ということが発話者本人及びその母親の出身地によって明らかになった。

今後も、 \overline{OO} 型の下降音調及び、今回の調査において興味深い結果の出た \overline{OO} 型を中心として、アクセントの認識、知覚そして発話についてさらに調査をすすめ、問題点を明らかにしていきたい。

文 献

- 1) 杉藤美代子 (1982) 「近畿方言 \overline{OO} 型アクセント」、『日本語アクセントの研究』三省堂。
- 2) 国立国語研究所 (1980) 『大都市の言語生活分析編』三省堂。
- 3) 杉藤美代子 (1982) 「アクセントの音響的特徴——合成音声による研究——」、『日本語アクセントの研究』三省堂。
- 4) 杉藤美代子 (1982) 「アクセントの生成と知覚の個人差および方言差——心理実験による研究——」、『日本語アクセントの研究』三省堂。
- 5) 藤崎博也、杉藤美代子 (1977) 「音声の物理的性質」、『岩波講座日本語 5 音韻』岩波書店。